

2026 年度 社会福祉学科

小 論 文

〔自己推薦 A O (A)〕 14-02

注 意

1. 監督者の合図があるまで問題冊子は開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙のきめられた箇所に記入してください。

以下の文章を読んで、問いに答えなさい。

はるきさんという人がいる。はるきさんは、くちうるさく指示をだされると突発的に不安定になり、ほかの人をつきとばしてしまうことがある。とはいえ、人とのコミュニケーションをいやがっているわけではなく、むしろ「かまってほしい」くらいのところがある。いってほしいことを、周囲の人に何度もいわせたり、ほめてもらおうとしたり、逆に「だめ」といわせようとして「よくないこと」をわざとしてみせる。けれども、それは「自分が満足できればそれでいい」という、あくまで一方通行が基本になっているようにみえる。はるきさんは人からの指示がきけない、わからないのではない。だが、自分がすでにやったことをもう一度させようと言われると、それはイヤなのだ。すでに「つぎのモード」にうつっているのに、自分としては「すでにおわっていること」をさせられるのは納得できないのである。そんなとき、はるきさんは、顔をそむけて、手で相手をおいはらおうと、ジェスチャーをする。また、人とのコミュニケーションは好きだが、あまりに接近されるのは、きらっているところがある。つまりは、自分の生活リズムとテリトリーをまもって生活している。

自閉症者はコミュニケーションに障害があるといわれている。その障害とは、うまく他人とコミュニケーションがとれないことだとされている。

自閉症は「孤立症」ではない。たしかに孤立傾向のつよい人もいる。だが、それは自閉症のひとつの類型であって、自閉症のすべてではない。人と接するのが好きな自閉者はたくさんいる。ただ、その「かわりかた」が非自閉者にとっては「奇妙にみえる」ということなのだ。

わたしは、自閉者と接するようになった当初、「なんてこの人たちのコミュニケーションは自分勝手なんだろう」と感じたことがあった。それが「わるい」とおもったのではなく、ただそう感じたのだった。

そして、しばらくして気がついた。なぜ、わたしは自閉者を「自分勝手だ」と感じたのだろうか。それは、わたしが「このように接したら、このように反応してほしい」と期待していたからであった。「このようなとき、人は「ふつう」このように反応するものだし、それが当然だ。そうしないのは勝手だ」。ごうまんにも、わたしは、そのようにかん

がえていたのだ。

そこで、わたしの頭はひっくりかえった。「なんてわたしは自分勝手なコミュニケーションをしていたのだろうか」と、むしろ自分の勝手さに気づかされたのだ。文化人類学の用語でいえば、わたしは自文化中心主義にとらわれていたのだ。わたしの常識は、自閉者の非常識であり、わたしの「ものさし」を、身勝手にも、おしつけていたのである。

よくかんがえてみると、そもそも、だれかを「自分勝手」とみなすこと自体が、無邪気な発想にもとづいている。「あの人は勝手だ」。じつは、そのようにいうことはできないのではないか。⁽¹⁾なぜなら、「勝手だ」と感じるのは、「こういうときは、こう反応すべきだ」「それがあたりまえだ」という想定を、勝手に自分のなかにつくりあげているからである。それこそ身勝手な期待と想定であるといえるのではないか。

わたしは、「漢字という障害」という論文で、つぎのようにかいた。

知的障害者のなかには、ことばでコミュニケーションをとること自体に困難をもつひともいる。コミュニケーションとは、相互行為によってなりたつものである。それゆえ、その「困難」の原因を一方だけに課することはできない。いうなれば関係性の問題である（あべ 2006：151）。

なんと「しらじらしい」ことだろう。自分でもよく理解できていないのに、あたかも自分は「理解ある」人間であるかのように「論じて」いる。「わかる」ということは、なにか失敗してみないことには、わかりえないのかもしれない。

身勝手なコミュニケーションとは、片方だけが身勝手であることによって成立するのではない。双方がひとしく身勝手に、自分さえよければいいという態度にもとづいて行動していることによって成立するのだ。そして、さらに大事なことは、わたしたち人間すべてが、いつもどこでも身勝手にいきている、ということだ。

なにが身勝手かというのは、人それぞれで相対的であり、人はみな、ひとしく身勝手だということだ。ただ、「身勝手」のありかたが、それぞれちがうというだけのことなのだ。おなじような「身勝手さ」をもつ人同士では、自分が「身勝手」なことに気がつかない、気がつけないのだ。

自閉者ではないわたしが、自閉者のコミュニケーションが自分勝手であると感じると⁽²⁾

き、それはまさに、「鏡」にうつった自分のすがたを発見するときである。それに気づけないままでは、うまくいかないコミュニケーションの責任を、片方だけにおしつけてしまうことになる。その片方とは、いつも、少数者、社会的弱者ではなかっただろうか。そしてそれが、自閉者の「コミュニケーション障害」とよばれるものの実態なのではないだろうか。

「非自閉者であるわたしは、自分勝手なことはしないし、自閉者よりもコミュニケーションが上手である」。そんな根拠はどこにもない。もし、わたしがそのように自覚してしまっていたなら、それは、非自閉者と自閉者との、不平等な関係がうみだしたものであり、それはつまり、非自閉者のつよい立場（権力）が可能にしたものだったのだ。

したがって、ここで重要なのは、「だれが（よりいっそう）自分勝手なのか」を判断することなどではなく、「どちらに（よりいっそう）権力があるか」をふまえることである。コミュニケーションを抑圧するのは、そういった「権力のちが⁽³⁾い」であって、「どちらが勝手か」ではないのである。

出典：あべ・やすし（2023）「コラム 3 「コミュニケーション障害」ってなんだろう」『ことばのバリアフリー：情報保障とコミュニケーションの障害学 増補新版』生活書院. pp. 65-67

問 1. 下線部(1)「じつは、そのようにいうことはできないのではないか」とあるが、その理由を100字以内で説明しなさい。

問 2. 下線部(2)「自閉者ではないわたしが、自閉者のコミュニケーションが自分勝手であると感じるとき、それはまさに、「鏡」にうつった自分のすがたを発見するときである」とあるが、なぜそのように言えるのか、本文の内容をふまえて200字以内で説明しなさい。

問 3. 下線部(3)について、著者のいう「権力」とはどのようなものかを本文の内容をふまえて簡潔にまとめたうえで、コミュニケーション障害についてのあなたの考えを述べなさい（字数は問いません）。